

第4章 サポステに來所した中途退学者の実態：支援者への量的調査から

第1節 はじめに

本章の目的は、地域若者サポートステーション（以下、サポステ）の利用者に関する調査をもとに、サポステに來所する中途退学者（以下、中退者）の特徴を多角的に明らかにすることである。

同調査は、ある期間におけるサポステ來所者全体を対象とするものであるが、本章では特に中退者に着目した分析をおこなう。具体的には、サポステに來所する中退者は、①いつ、どのような経路をたどり、サポステに來所し、その後どのような状況にあるのか、②新規登録時の状態（生活習慣や意識、進路決定に向けた状況（困難度）のレベル¹など）はどうか、③過去にどのような経験をしてきたのかなどについて分析する。なお、利用者のレベル別の特徴は、補論で分析した。

以下、それらの点について、順に分析を進める。サポステ調査の概要は、下記のとおりである。

● 使用するデータ

調査実施機関：若者自立支援中央センター

調査期間：2014年2月～3月

調査対象：全国のサポステにおける支援者に調査票を配布し、2012年10月～12月に新規登録をしたすべてのサポステ利用者について回答していただいた。回収票数は6,625票である。なお、分析では、中学・高校在学中の者などを除き、サポステ利用対象者である15歳～39歳の若年者を主対象とした。そのため、分析対象者数は、5,625名である。

第2節 サポステ利用者の基礎情報

まず、サポステ利用者の基礎情報として、新規登録時の年齢、利用の経緯、進路決定状況と直近（調査時点）の状況について見ていこう。

1. 新規登録時の年齢

図表4-1より、利用者の新規登録時の年齢について、学歴別に見てみると、高校中退者では、10代後半で來所する割合が34.7%と最も高く、20代後半までで8割以上を占めている。他方、専門学校・短大・高専中退者の場合、20代前半での來所が38.8%、大学中退者の場合、20代後半での來所が38.2%と最も高くなっている。大学中退者の場合、中退直後だと

¹ レベルのイメージについては、補論を参照されたい。

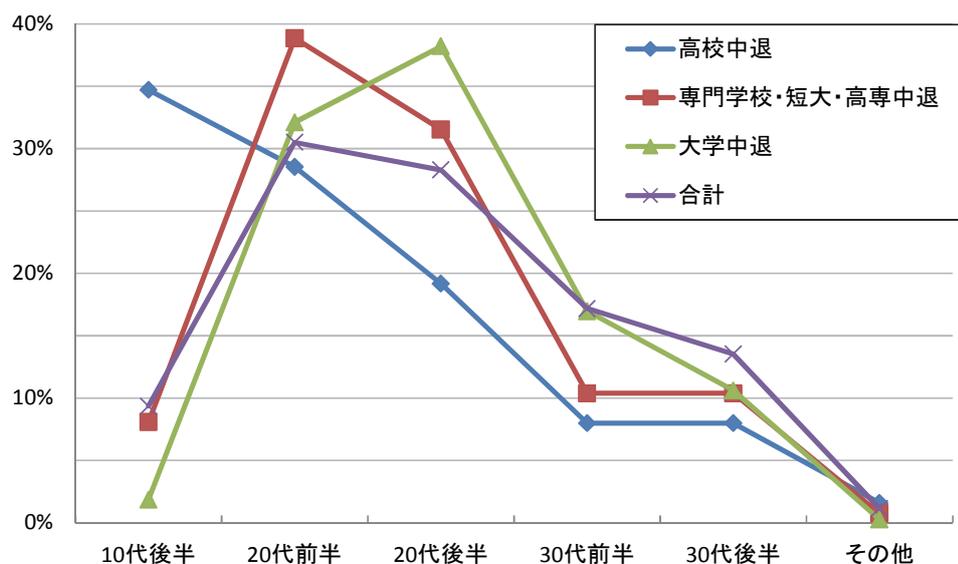
考えられる 20 代前半からサポステ来所までに数年程度のブランクがある者が多くいるのかもしれない。

また、例えば、高卒者と高校中退者など、同レベルの教育段階内で比較してみると、卒業者よりも中退者のほうが、年齢的に早い時期に来所する人の割合が高いことがわかる。

図表 4 - 1 利用者の年齢構成² (図は中退者のみ)

	10代後半	20代前半	20代後半	30代前半	30代後半	その他	合計	
							%	N
中卒	35.8	20.9	17.7	9.8	13.9	1.9	100.0	316
高校中退	34.7	28.5	19.2	8.0	8.0	1.6	100.0	438
高卒	10.8	31.7	23.1	15.9	16.9	1.6	100.0	1,333
高等教育在学中	14.5	73.8	9.4	1.6	0.8	0.0	100.0	385
専門学校・短大・高専中退	8.1	38.8	31.5	10.4	10.4	0.8	100.0	260
専門学校・短大・高専卒業	1.3	24.6	31.3	22.9	18.3	1.6	100.0	837
大学中退	1.9	32.1	38.2	17.0	10.6	0.3	100.0	377
大卒	0.1	23.7	37.7	23.8	14.1	0.7	100.0	1,416
大学院	0.0	15.7	42.6	28.7	11.1	1.9	100.0	108
合計	9.4	30.5	28.3	17.2	13.5	1.1	100.0	5,588

注：年齢・無回答は分析から除いた。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



2. 利用の経緯

つぎに、図表 4 - 2 より、サポステ利用の経緯について見てみると、高校中退者の場合、「ハローワーク (HW) 以外の機関の紹介」(36.6%)、「家族や知人の紹介」(23.0%)が多く、「学校からの紹介」も 8%程度見られる。他方、高等教育中退者(専門学校・短大・高専中退者および大学中退者)の場合、「HW 以外の機関の紹介」は 2割前後見られるが、「学校からの紹介」はほとんどなく、かわりに「家族や知人の紹介」、「サポステのチラシや HP で」の割合が高くなっている。また、図表は掲載していないが、男女で比較すると、男性のほう

² 12歳(高校・中退)が1名、14歳(学歴・無回答)が1名いたが、誤答の可能性が高いため、分析から除外した。

が「家族や知人の紹介」が、女性のほうが「サポステのチラシやHPで」や「その他」が多くなっている。

図表 4-2 利用の経緯

	ハローワークからの紹介	HW以外の機関の紹介 (医療福祉を含む)	学校からの紹介	家族や知人の紹介	サポステのチラシやHPで	その他	合計	
							%	N
中卒	7.9	40.0	5.2	20.3	14.4	12.1	100.0	305
高校中退	7.2	36.6	7.7	23.0	16.5	9.1	100.0	418
高卒	14.3	21.4	5.7	18.5	26.0	14.1	100.0	1,280
高等教育在学中	6.8	12.7	29.7	15.1	25.9	9.7	100.0	370
専門・短大・高専中退	9.7	25.1	1.6	25.5	26.7	11.3	100.0	247
専門・短大・高専卒業	17.3	17.0	1.0	15.1	34.2	15.4	100.0	813
大学中退	10.4	19.3	0.5	28.9	28.3	12.5	100.0	367
大卒	19.4	15.2	1.1	15.5	35.6	13.1	100.0	1,355
大学院	18.3	12.5	5.8	13.5	34.6	15.4	100.0	104
合計	14.1	20.6	5.0	18.4	28.7	13.2	100.0	5,378

注：利用経緯の無回答は分析から除いた。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

3. 進路決定状況

他方、図表 4-3 より、進路決定状況について見てみると、高校中退者の場合、「進学」(6.7%)や「他機関へのリファー」(10.2%)、「進路未決定(利用中)」(18.2%)などが、全体の割合よりも高くなっている。専門・短大・高専中退者の場合でも、「他機関へのリファー」(12.4%)や「進路未決定」(16.7%)、「その他」(4.0%)が全体よりも高く、大学中退の場合、「職業訓練」(5.4%)や「他機関へのリファー」(8.8%)、「利用中断」(29.5%)が高くなっている。

「就職」者については、どの教育段階でも、卒業者と比較して、中退者で低い割合となっている。

図表 4-3 進路決定状況

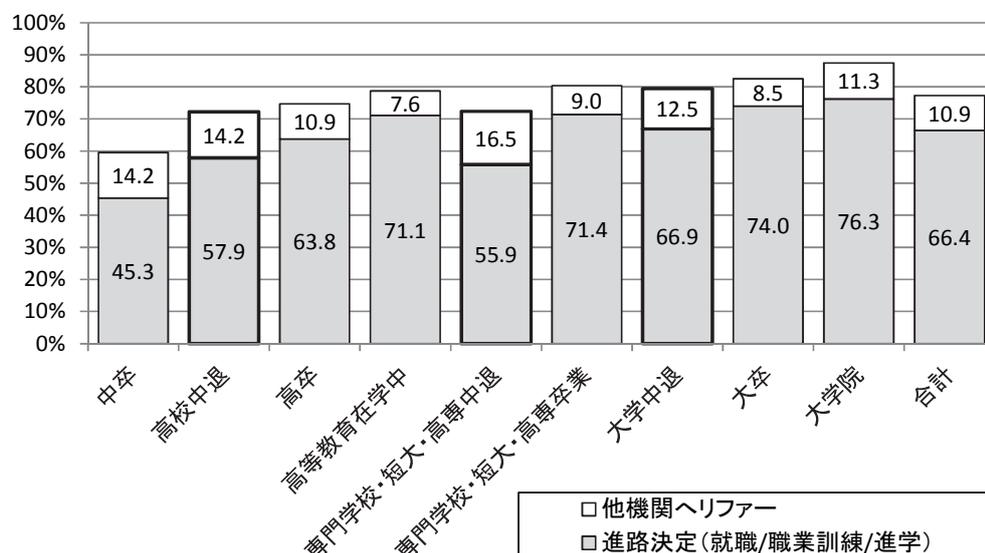
	就職	職業訓練	進学	他機関へ リファー	利用中断	その他	進路未決定 (利用中)	合計	
								%	N
中卒	27.8	2.3	2.9	10.4	27.2	2.3	27.2	100.0	309
高校中退	30.5	4.2	6.7	10.2	28.6	1.6	18.2	100.0	433
高卒	40.5	4.4	1.3	7.9	27.5	4.2	14.1	100.0	1,298
高等教育在学中	39.6	1.6	6.1	5.1	33.4	4.3	9.9	100.0	374
専門・短大・高専中退	37.8	2.8	1.2	12.4	25.1	4.0	16.7	100.0	251
専門・短大・高専卒業	48.9	4.5	0.2	6.7	24.9	3.4	11.3	100.0	830
大学中退	39.9	5.4	1.9	8.8	29.5	2.7	11.8	100.0	373
大卒	47.5	4.7	0.7	6.1	28.5	2.5	10.0	100.0	1,384
大学院	52.8	3.8	0.9	8.5	24.5	0.9	8.5	100.0	106
合計	41.9	4.1	1.8	7.9	28.0	3.1	13.2	100.0	5,480

注：進路決定状況の無回答は分析から除いた。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

また、サポステ利用中断者を除いて、進路決定(就職/職業訓練/進学)率を算出した場合、その進路決定率は、高校中退者で57.9%、専門学校・短大・高専中退者で55.9%、大学中退者で66.9%となっている(図表 4-4)。これを見ても、中退者の進路決定率は、中卒

者よりも高くなっているが、それ以外の層と比べると、低い割合であることがわかる。特に専門学校・短大・高専で、中退者と卒業生間での進路決定率の差が大きい。

図表 4-4 利用中断を除く進路決定率



4. 直近の状況

さらに、直近（調査時点）の状況について見てみると、中退者層では、「就労」の割合は全体よりも若干低くなっている。また、特に高校中退者、大学中退者で「無業」の割合が高くなっている（図表 4-5）。ただし、どの学歴層でも「(サポステでは) 把握していない」が多い。

図表 4-5 直近の状況

	就労	職業訓練	就学	無業	把握して いない	その他	合計		「把握して いない」を除いた、就 労、職業訓練、 就学の割合(%)
							%	N	
中卒	19.3	2.9	4.6	25.8	40.8	6.5	100.0	306	45.3
高校中退	26.0	1.2	5.0	22.9	41.4	3.6	100.0	420	54.9
高卒	28.8	1.9	1.9	15.1	48.5	3.8	100.0	1,270	63.3
高等教育在学中	22.7	1.1	8.8	7.7	54.0	5.8	100.0	365	70.8
専門・短大・高専中退	26.0	2.1	1.2	15.3	49.2	6.2	100.0	242	57.7
専門・短大・高専卒業	33.2	1.6	0.3	14.0	48.6	2.4	100.0	799	68.1
大学中退	28.5	1.7	1.4	19.3	45.3	3.9	100.0	358	57.7
大卒	31.9	1.7	0.4	14.4	48.3	3.3	100.0	1,355	65.8
大学院	39.0	2.0	1.0	13.0	41.0	4.0	100.0	100	71.2
合計	28.9	1.7	2.2	15.7	47.7	3.8	100.0	5,327	62.7

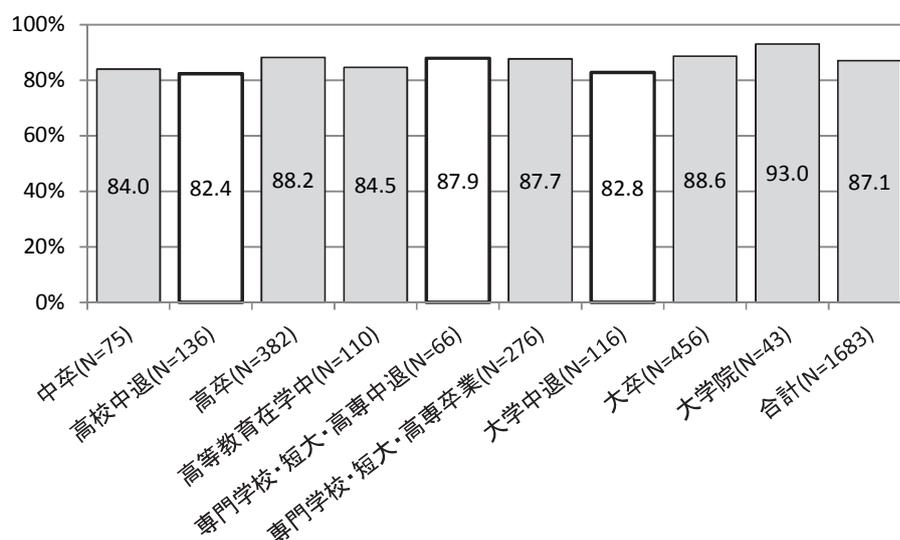
注：直近の状況の無回答は分析から除いた。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

そのため、「(サポステでは) 把握していない」場合を除いて、直近の進路決定（就労／職業訓練／就学）割合を算出した結果もあわせて図表 4-5 に掲載している。これを見ると、

どの教育段階でも、中退者層に占める就労／職業訓練／就学者の割合は5割台となっており、それ以外の層と比較して、低い値となっている。具体的には、高校中退者の54.9%、専門学校・短大・高専中退者および大学中退者の57.7%が、直近の状況において、就労、職業訓練あるいは就学の状況にある。ただし、先述したように、進路決定状況において、中退者層の進路決定率は低い傾向にあったことを考えると、いったん進路が決定した後は調査時点（直近）まで継続して就労等の状態にある者は少なくはないと推察される。

そこで、進路決定状況と直近（調査時点）の状況との組み合わせから、進路決定（就職／職業訓練／進学）者のうち、直近の状況においても継続して就労／職業訓練／就学の状態にある者の割合（以下、進路決定継続率とする）がどの程度であるのかについて、検討する。学歴別の進路決定継続率は、図表4-6に示したとおりである³。ここに見られるように、卒業生でも中退者でも、進路決定継続率は総じて高く、8割以上に及んでいる。高校中退者、大学中退者で進路決定継続率は若干低い、専門学校・短大・高専中退者では同教育段階卒業生とほぼ同等であり、一度就労などの進路決定がなされた場合、中退か否かに関わりなく、それが継続される傾向があることが確認された。

図表4-6 進路決定継続率



第3節 新規登録時の本人の状況と新規登録時のレベルの診断

つづいて、新規登録時の本人の状況と新規登録時の進路決定に向けた状況（困難度）のレベルについて見よう。

³ ただし、直近の状況が「把握していない」者は除いた比率。

1. 新規登録時の本人の状況

まず、図表4-7より、新規登録時の本人の状況について見てみると、多くの項目で、中退者層では課題がある者の割合が高いことがわかる。特に生活面(生活リズムが不規則など)とコミュニケーション面(集団に対する苦手意識が強いなど)で、卒業者と中退者の差が大きい。高校中退に関してこれまでも指摘されてきたことであるが、中退の背景には、生活リズムや人間関係の問題が大きく関係していることが、ここから考えられる。また、これは高校中退だけでなく、高等教育中退の場合にも同様に当てはまる問題ではないかと推察される。

図表4-7 新規登録時の本人の状況（インテイク時の担当者記入のみ）

	生活				コミュニケーション				N
	生活リズムが不規則(昼夜逆転など)	時間を守ることができない	ほとんど外出することがない	就職活動をするだけの体力がない	相手を見て話せない	声が小さく聞き取りづらい	聞かれたことに対して、適切な受け答えができない	集団に対する苦手意識が強い(セミナー等の集まりに参加するのを怖がるなど)	
中卒	41.3	17.5	35.6	26.3	21.9	23.8	25.6	48.1	160
高校中退	42.9	18.4	31.6	20.4	15.3	22.4	13.3	39.8	196
高卒	24.5	9.5	22.8	14.3	18.3	17.1	19.6	34.1	601
高等教育在学中	15.8	7.3	18.8	10.9	14.5	14.5	16.4	42.4	165
専門・短大・高専中退	35.2	16.6	26.9	18.6	20.0	19.3	21.4	37.9	145
専門・短大・高専卒業	16.3	6.2	15.0	7.0	14.7	12.4	18.3	26.4	387
大学中退	30.1	14.1	27.0	19.0	17.8	21.5	19.6	37.4	163
大卒	18.1	5.1	14.3	12.6	10.2	10.5	11.5	24.8	609
大学院	16.4	5.5	10.9	10.9	7.3	10.9	12.7	18.2	55
合計	24.2	9.5	20.9	14.4	15.3	15.7	17.1	32.6	2,522

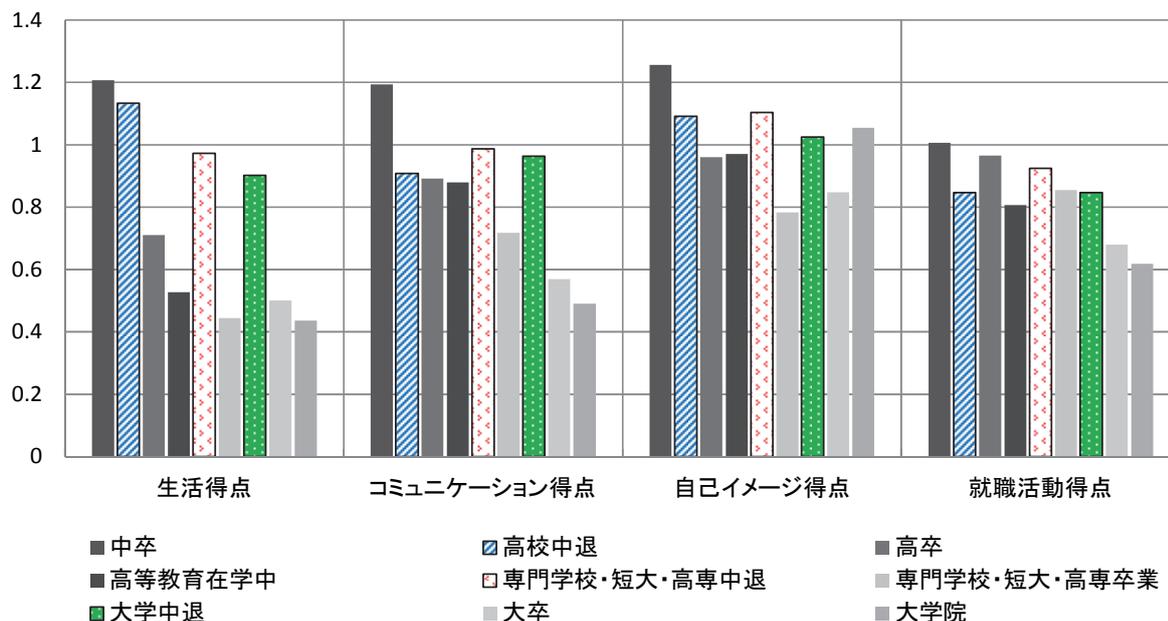
	自己イメージ				就職活動				基礎的な読み書き計算ができない	N
	自己否定的感情が強い(「自分に何かができるとは思えない」など)	進路に限らず、自分で選択することができない	働いている自分がイメージできない	仕事への偏った見方にこだわる(「事務職はしゃべらなくてもいい」など)	相談や応募先の求人選択をすることができない	求職活動をしようと思っていればよいかわからない	履歴書をまとめることができない(経歴や経験の説明ができない)	就職活動の失敗理由がわからない(考えられない、受け入れられないなど)		
中卒	43.1	35.0	31.3	16.3	26.3	36.9	30.0	7.5	11.3	160
高校中退	40.3	27.6	24.0	17.3	26.0	29.1	18.9	10.7	5.1	196
高卒	35.1	22.3	20.6	18.0	26.5	32.1	23.1	14.8	5.0	601
高等教育在学中	30.3	23.6	31.5	11.5	18.8	33.3	22.4	6.1	1.2	165
専門・短大・高専中退	34.5	31.7	22.1	22.1	22.1	37.9	21.4	11.0	5.5	145
専門・短大・高専卒業	28.2	15.2	15.5	19.4	20.9	30.2	18.9	15.5	1.6	387
大学中退	37.4	19.0	21.5	24.5	22.1	30.1	19.6	12.9	1.2	163
大卒	31.9	16.1	16.4	20.4	17.6	25.1	14.0	11.3	0.8	609
大学院	36.4	23.6	23.6	21.8	18.2	16.4	14.5	12.7	0.0	55
合計	34.0	21.3	20.6	18.9	22.0	30.1	19.7	12.3	3.3	2,522

注：インテイク時の担当者による回答のみを分析した。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

また、図表4-7の項目を「生活」、「コミュニケーション」、「自己イメージ」、「就職活動」の4つのカテゴリーにわけ、それぞれの平均値を算出しグラフ化したものが図表4-8である。得点は各4点満点であり、得点が高いほうが課題の多いことを意味する。これを見ると、就職活動以外の3側面、特に生活面での得点において、中退者層の平均値とそれ以外の層との差が大きくなっている。

さらに、中退者間で平均値を比較すると、生活面に関しては、高校中退者が最も高く、コミュニケーションや自己イメージに関しては、高等教育中退者、特に専門学校・短大・高専中退者で高くなっており、それらの層でそれぞれの側面での課題が大きいことがうかがえる。

図表 4-8 新規登録時の本人の状況（平均値）（インテイク時の担当者記入のみ）

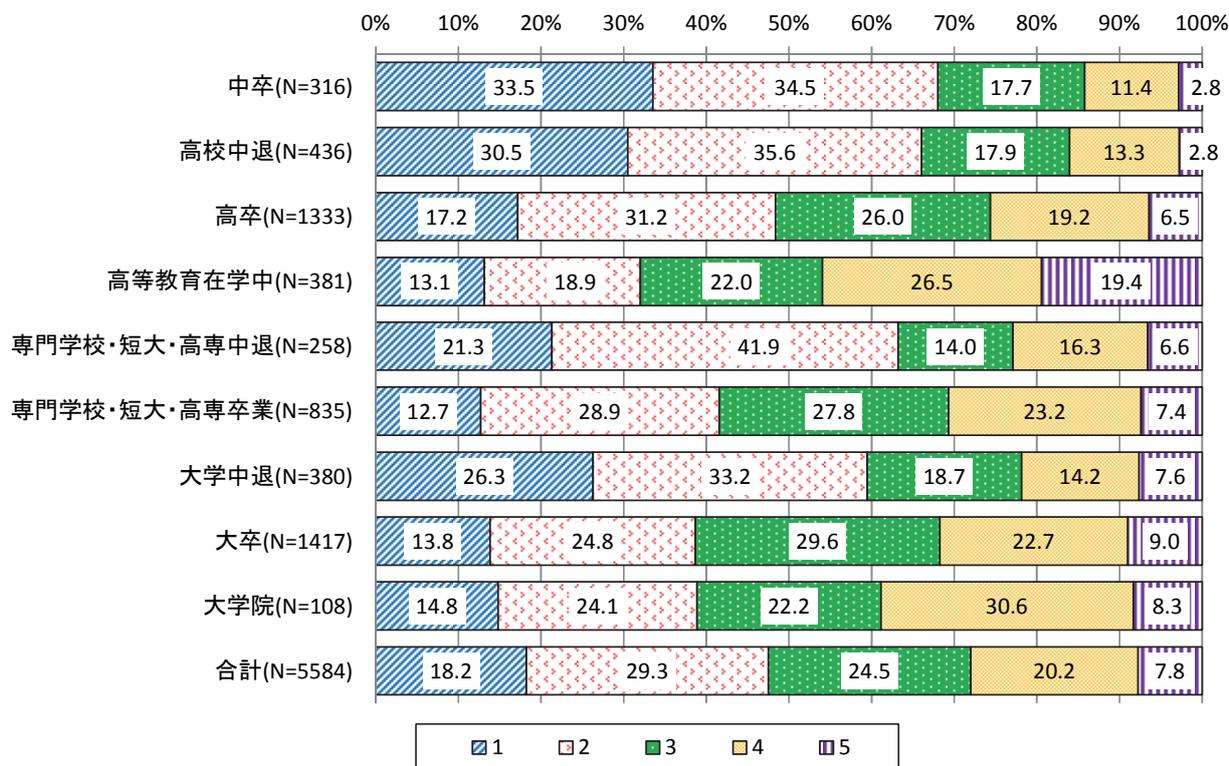


2. 新規登録時のレベル

つぎに、新規登録時の進路決定に向けた状況（困難度）のレベルについて検討しよう。レベルは1から5までとなっており、5に近いほうが就職や進路決定に近いことを示す。

学歴別にレベル構成を見てみると（図表4-9）、中退者層でレベル1あるいは2に該当する者の割合が6割前後と、かなり高くなっている。具体的には、高校中退者の66.1%、専門学校・短大・高専中退者の63.2%、大学中退者の59.5%が、レベル1あるいは2に該当している。中退者層には、就職や進路決定に達するまでには課題があり、時間を要すると判断された者が、他と比較すると、多く含まれていることがわかる。

図表 4-9 新規登録時のレベル構成



第4節 新規登録時の諸状況

最後に、新規登録時の諸状況、具体的には過去の就労経験、直近（登録以前）の無業期間、過去の学校、職場、家族・家庭での経験や疾病・障害の有無について、順に見ていこう。

1. 過去の就労経験

学歴別に過去の就労経験について示したのが、図表4-10である。なお、過去の就労経験は、「1年以上の正社員経験」と「非正規雇用経験」の有無の組み合わせから、「正規・非正規経験あり」、「正規のみ経験あり」、「非正規のみ経験あり」、「正規・非正規経験なし」の4カテゴリーに分類した。これを見ると、中退者層では、正規雇用経験ありの者が卒業者と比較してかなり少なく、非正規雇用の経験のみか、正規・非正規雇用どちらの経験もない者の割合が高くなっている。ただし、中退者間で比較すると、高校中退者で就労経験なしの割合が高く、大学中退者で正規雇用経験の割合が高い傾向が見られる。

図表 4-10 過去の就労経験

	正規・非正	正規のみ経	非正規のみ	正規・非正	合計	
	規経験あり	験あり	験あり	規経験なし	%	N
中卒	9.1	0.4	41.3	49.1	100.0	230
高校中退	4.8	0.6	55.5	39.1	100.0	330
高卒	21.4	5.6	51.8	21.3	100.0	960
高等教育在学中	1.9	0.4	42.6	55.0	100.0	258
専門・短大・高専中退	7.6	1.4	63.0	28.0	100.0	211
専門・短大・高専卒業	27.8	6.5	54.6	11.1	100.0	615
大学中退	6.6	4.2	66.8	22.5	100.0	289
大卒	24.1	8.9	51.9	15.0	100.0	1,057
大学院	14.3	4.8	54.8	26.2	100.0	84
合計	17.9	5.2	52.9	24.0	100.0	4,092

注：過去の就労経験の無回答は分析から除いた。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

2. 直近（新規登録以前）の無業期間

つぎに、直近（新規登録以前）の無業期間について見てみると（図表 4-11）、中退者と同レベルの教育段階での卒業者で無業期間が「なし」の割合はそれほど大きく違ってはいない。しかし、中退者では、それ以外の層と比較して、無業期間が3年よりも長くなっている者の割合が高い。過去の就労経験の結果と合わせて考えると、中退直後にサポステに来所した場合を除いては、中退直後からサポステ来所までに、何らかの就労経験を持たず、長年無業のままとなっていた者が、中退者には多いのかもしれない。

図表 4-11 直近の無業期間

	なし(就労な	半年未満	半年～1年	1年～2年	3年～5年	5年以上	合計	
	ど)						%	N
中卒	19.9	20.6	9.9	15.2	9.2	25.2	100.0	282
高校中退	17.4	23.0	15.0	11.8	12.6	20.3	100.0	374
高卒	18.6	27.8	17.0	13.5	9.2	14.0	100.0	1,135
高等教育在学中	76.9	9.7	4.7	3.1	1.2	4.4	100.0	321
専門・短大・高専中退	20.7	30.0	13.1	11.4	9.7	15.2	100.0	237
専門・短大・高専卒業	20.1	30.1	16.1	13.9	8.3	11.5	100.0	747
大学中退	19.4	21.5	14.1	14.1	11.8	19.1	100.0	340
大卒	23.6	27.3	17.3	13.9	8.1	9.8	100.0	1,240
大学院	28.7	18.1	13.8	8.5	13.8	17.0	100.0	94
合計	24.5	25.4	15.0	12.8	8.7	13.5	100.0	4,836

注：直近の無業期間の無回答は分析から除いた。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。

3. 学校、職場、家族・家庭での経験、疾病・障害の有無

そして最後に、図表 4-12 より、過去の諸経験や疾病・障害の有無について検討する。

はじめに学校での経験について見てみると、不登校経験や進級に関わる成績不振など、学校でネガティブな経験をしたことのある中退者の割合がかなり高いことがわかる。特に高校中退者に占める不登校経験の割合は 66.3%と、7割近くとなっている。また、専門学校・短

大・高専中退者に占めるいじめ経験の割合も41.4%と高い。これまでの学校生活を通じたネガティブな経験の蓄積により、学校環境への適応が困難となっている層が、中退者の中には少なくない割合でいるのかもしれない。

家族、家庭での経験に関しても、中退者層で高い割合となる項目が多くなっている。特に高校中退者での「家庭内の不和」(34.7%)、「親との離死別」(21.4%)、「貧困」(16.3%)、専門学校・短大・高専中退者での「親の過干渉」(26.9%)の割合が他と比べて高い傾向が見られる。ただし、大学中退者では、家族、家庭での経験に関しては、それほど問題が指摘された者の割合は高いとはいえない。

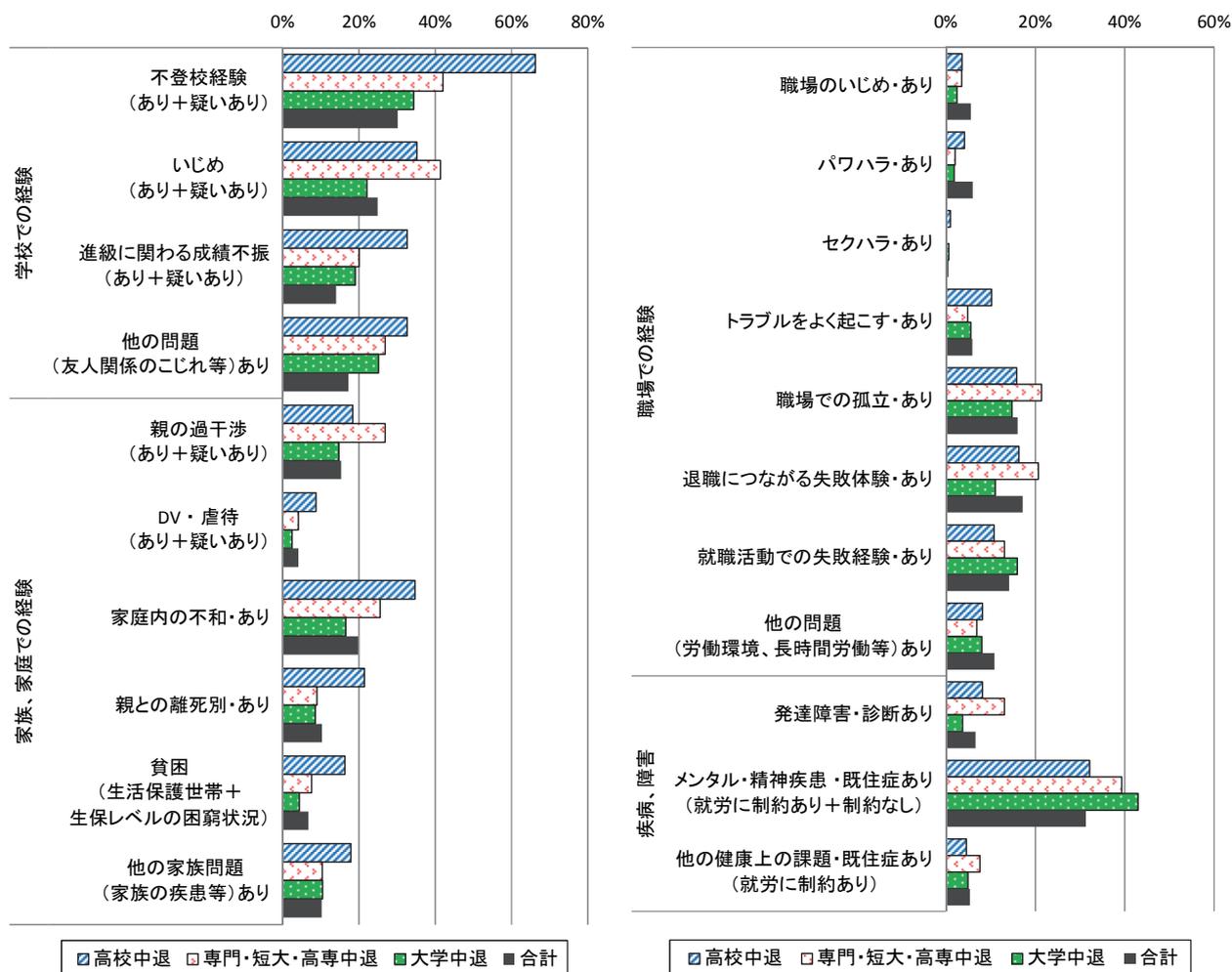
図表4-12 学校、職場、家族・家庭での経験、疾病・障害

(インタビュー時の担当者記入のみ、図は中退者のみ)

	学校での経験				家族、家庭での経験						N
	不登校経験 (あり+疑いあり)	いじめ (あり+疑いあり)	進級に関わる成績不振 (あり+疑いあり)	他の問題 (友人関係のこじれ等)あり	親の過干渉 (あり+疑いあり)	DV・虐待 (あり+疑いあり)	家庭内の不和・あり	親との離死別・あり	貧困 (生活保護世帯+生保レベルの困窮状況)	他の家族問題 (家族の疾患等)あり	
中卒	68.1	46.9	33.1	30.0	17.5	11.9	34.4	25.6	23.8	16.9	160
高校中退	66.3	35.2	32.7	32.7	18.4	8.7	34.7	21.4	16.3	17.9	196
高卒	31.6	27.0	15.3	14.8	15.0	4.7	19.8	12.1	9.8	11.1	601
高等教育在学中	37.0	26.7	15.8	19.4	17.6	2.4	12.7	6.7	1.2	7.9	165
専門・短大・高専中退	42.1	41.4	20.0	26.9	26.9	4.1	25.5	9.0	7.6	10.3	145
専門・短大・高専卒業	17.6	24.3	6.5	14.2	12.7	2.8	14.5	6.7	2.3	8.8	387
大学中退	34.4	22.1	19.0	25.2	14.7	2.5	16.6	8.6	4.3	10.4	163
大卒	11.7	12.2	3.9	8.5	11.8	1.6	15.9	5.7	0.8	6.4	609
大学院	7.3	5.5	5.5	9.1	21.8	3.6	14.5	5.5	3.6	9.1	55
合計	30.1	24.9	14.0	17.2	15.3	4.1	19.7	10.3	6.7	10.2	2,522

	職場での経験							疾病、障害			N	
	職場のいじめ・あり	パワハラ・あり	セクハラ・あり	トラブルをよく起こす・あり	職場での孤立・あり	退職につながる失敗体験・あり	就職活動での失敗経験・あり	他の問題 (労働環境、長時間労働等)あり	発達障害・診断あり	メンタル・精神疾患・既往症あり (就労に制約あり+制約なし)		他の健康上の課題・既往症あり (就労に制約あり)
中卒	3.8	1.9	0.6	3.8	6.3	5.6	8.8	6.9	8.8	26.9	6.3	160
高校中退	3.6	4.1	1.0	10.2	15.8	16.3	10.7	8.2	8.2	32.1	4.6	196
高卒	7.8	6.8	0.7	6.2	16.1	22.3	14.3	10.3	6.7	30.3	6.2	601
高等教育在学中	0.6	1.2	0.0	1.2	3.0	5.5	5.5	0.6	11.5	28.5	2.4	165
専門・短大・高専中退	3.4	2.1	0.0	4.8	21.4	20.7	13.1	6.9	13.1	39.3	7.6	145
専門・短大・高専卒業	7.0	9.6	1.0	7.0	19.6	22.5	17.1	17.6	4.9	26.4	6.2	387
大学中退	2.5	1.8	0.6	5.5	14.7	11.0	16.0	8.0	3.7	42.9	4.9	163
大卒	5.7	8.2	0.2	5.7	18.9	16.4	17.2	13.1	5.3	32.0	3.9	609
大学院	3.6	1.8	0.0	5.5	20.0	12.7	10.9	12.7	0.0	38.2	5.5	55
合計	5.6	6.0	0.5	5.9	16.0	17.2	14.2	10.8	6.7	31.3	5.4	2,522

注：インタビュー時の担当者による回答のみを分析した。また、学歴・無回答は、分析には含まれるが非掲載とした。



ここで特に「貧困」に注目してみると、高校中退者では約16%と、その割合が中卒者について高くなっているが、高等教育中退者ではさほど高くはないことが読みとれる。これまで中退が生じる理由のひとつとして、経済的理由（学費負担の問題）が指摘されてきたが、サポステに来所する高等教育中退者の場合、少なくとも深刻な経済状況にあるがために中退に至ったケースはそれほど多くないのかもしれない。経済的理由を主として中退した者は、サポステに来所するよりも、中退後すぐに就労するか、求職活動のためにハローワーク等の機関に来所するケースが多いのではないかと推測される。

他方、職場での経験に関しては、就職活動や就労（特に正規雇用）での経験が少ないためか、中退者に目立った特徴はあまり見出せないが、高校中退者で、「トラブルをよく起こす」（10.2%）が、専門学校・短大・高専中退者で、「職場での孤立」（21.4%）や「退職につながる失敗体験」（20.7%）が、大学中退者で、「就職活動での失敗経験」（16.0%）が、比較的高い割合となっている。

また、疾病や障害に関しては、中退者層、特に大学中退者での、「メンタル・精神疾患」における既往症ありの割合が42.9%と高くなっており、専門学校・短大・高専中退者では、

「発達障害・診断あり」の割合が13.1%と全体より高い。

第5節 まとめ

以上、サポステに来所した中退者の特徴について検討してきた。ここでは、高校中退者、高等教育（専門・短大・高専、および大学）中退者ごとに、その特徴をまとめる。分析の結果見出されたおもな知見は、以下のとおりである。また、図表4-13に、各中退者層の特徴を整理した。

高等教育（専門学校・短大・高専、大学）中退者：

- ①新規登録時の年齢は、専門学校・短大・高専中退者の場合、20代前半が、大学中退者の場合、20代後半が多く、両者とも、家族・知人の紹介やサポステのチラシ・HPを見て、サポステに来所する人が多い。学校からの紹介はほとんどない。
- ②進路決定（就職、職業訓練、進学）率、および直近（調査時点）の進路決定（就労、職業訓練、就学）率については、高校中退者と同様、同じ教育段階の卒業者と比べて、その割合は低い。進路決定率について具体的に見ると、専門学校・短大・高専中退者の場合、55.9%、大学中退者の場合、66.9%となっている。また、それら進路決定者のうち、調査時点（直近）でも就労、職業訓練、就学いずれかの状態にある者の割合（進路決定継続率）は、専門学校・短大・高専中退者で87.9%と高く、大学中退者でも82.8%となっている。
- ③新規登録時の本人状況については、同じ教育段階の卒業者と比べて、諸々の面で課題が見られる。特に専門学校・短大・高専中退者では、コミュニケーション面や自己イメージ面での課題が大きい。また、新規登録時のレベルについては、進路決定や就職から遠い状態にあるレベル1か2と判断された者が、専門学校・短大・高専中退者で63.2%、大学中退者で59.5%と、半数以上を占めている。
- ④過去の就労経験に関しては、専門・短大・高専中退、大学中退ともに正規雇用経験者の割合は低いが、高校中退者と比べると、就労経験なしの者は20%台と比較的少ない。高校中退者同様、サポステ来所までの無業期間が長くなる場合は多い。他方、正規雇用経験者については、大学中退者で10.8%となっており、中退者の中では比較的高い割合となっている。
- ⑤過去の諸経験に関しては、高校中退者同様、学校や家族・家庭でネガティブな経験をしている割合が高い。より細かく見ると、専門学校・短大・高専中退者では、いじめ経験の割合が41.4%、親の過干渉の割合が26.9%と、他の層と比べて高いが、大学中退者では、それほど家族・家庭に問題を抱えている者の割合は高くない。他方、疾病や障害については、メンタル・精神疾患における既往症ありの割合が大学中退者で42.9%と高く、発達障害の診断ありの割合が専門学校・短大・高専中退者で13.1%と高くなる傾向が見られた。

高校中退者：

- ①新規登録時の年齢は 10 代後半から 20 代前半が多く、ハローワーク以外の機関の紹介（36.6%）や家族・知人の紹介（23.0%）によってサポステに来所する人が多い。学校からの紹介は 1 割弱（7.7%）である。
- ②進路決定（就職、職業訓練、進学）率、および直近（調査時点）の進路決定（就労、職業訓練、就学）率については、前者が 57.9%、後者が 54.9%と、同じ教育段階の卒業者と比べて、その割合は低くなっている。ただし、それら進路決定者のうち、調査時点（直近）でも就労、職業訓練、就学いずれかの状態にある者の割合（進路決定継続率）は 82.4%に及んでいる。
- ③新規登録時の本人状況については、卒業者と比較して、中退者では全体的に生活面やコミュニケーション面、自己イメージ面いずれにおいても課題が多く見受けられる。特に高校中退者では、生活面での課題が大きい。新規登録時のレベルを見ても、高等教育中退者同様、進路決定や就職から遠い状態にあるレベル 1 か 2 と判断された者が半数以上（66.1%）にのぼる。
- ④過去の就労経験に関しては、正規雇用経験者の割合が 5.4%と、高校卒業者と比べて、かなり低くなっている。サポステに来所するまでの無業期間が比較的長い者も多い。また、高校中退者では就労経験なしの割合が 39.1%と、他の中退者よりも高い。
- ⑤過去の諸経験に関しては、学校や家族・家庭でネガティブな経験をしている者が多く、高校中退者の不登校経験率は 66.3%と高い。また、高校中退者に占める家庭内の不和（34.7%）、親との離死別（21.4%）、貧困（16.3%）の割合も、他の層と比較して、高くなっている。

図表 4-13 サポステを利用する中退者の特徴のまとめ

	高等教育中退		高校中退
	専門学校・短大・高専中退	大学中退	
利用者の年齢	20代前半(38.8%) ～20代後半(31.5%)	20代前半(32.1%) ～20代後半(38.2%)	10代後半(34.7%) ～20代前半(28.5%)
利用の経緯	サポステのチラシやHPで(26.7%)、 家族や知人の紹介(25.5%)	家族や知人の紹介(28.9%)、 サポステのチラシやHPで(28.3%)	HW以外の機関の紹介(36.6%)、 家族や知人の紹介(23.0%)
進路決定率	55.9%	66.9%	57.9%
直近の進路決定率	57.7%	57.7%	54.9%
進路決定継続率	87.9%	82.8%	82.4%
新規登録時の本人状況 (課題あり)	生活面(生活リズムが不規則など)、コミュニケーション面(集団に対する苦手意識が強いなど)、 自己イメージ面(自己否定感情が強いなど)		
新規登録時のレベル (1, 2の割合)	63.2%	59.5%	66.1%
過去の就労経験 (なしの割合)	28.0%	22.5%	39.1%
直近の無業期間 (なしの割合)	20.7%	19.4%	17.4%
過去の 経験	学校	いじめ(41.4%)	不登校(66.3%)、 進級に関わる成績不振(32.7%)
	家族、家庭	親の過干渉(26.9%)	家庭内の不和(34.7%)、親との 離死別(21.4%)、貧困(16.3%)
	職場	職場での孤立(21.4%)、 退職につながる失敗体験(20.7%)	就職活動での失敗経験(16.0%) トラブルをよく起す(10.2%)
	疾病、障害	発達障害・診断あり(13.1%)	メンタル・精神疾患・既往症あり (42.9%)

注1:「進路決定率」は、進路決定状況が、就職、職業訓練、進学の内いずれかである者の割合。ただし、利用中断、無回答のケースは除いて算出。

注2:「直近の進路決定率」は、直近(調査時点)の状況が、就労、職業訓練、就学の内いずれかである者の割合。ただし、把握していない、無回答のケースは除いて算出。

注3:「進路決定継続率」は、進路決定者のうち、直近(調査時点)においても進路が決まっている者の割合。ただし、直近の状況を把握していない、あるいは無回答のケースは除いて算出。

注4:「新規登録時のレベル」は、進路決定に向けた状況(困難度)を表す指標。レベルは1～5。5に近いほうが就職や進路決定に近い。

このようにサポステに来所する中退者は、卒業者と比較して、進路決定や就労などに向けて、様々な面で課題や困難を抱えている場合が多く見られること、そしてそれらの課題や困難は、彼ら彼女らの家庭環境や過去の学校・就労におけるネガティブな諸経験と不可分に生じている可能性が高いことが、本稿の結果から見えてきた。

また、「中退者」と一括りに言っても、どの教育段階で中退したかによって、サポステ登録時の本人状況や中退後の状況、そして抱えている課題・困難の内容や質なども異なることが明らかとなった。彼ら彼女らが抱える複合的な問題を考慮した上での取り組みが、中退者の就労支援において、求められるのかもしれない。

ただし、本章で扱ったサポステ利用者である中退者は、継続的な就労を目指すには課題や困難の度合いが比較的高い層であることが十分考えられる。中退者に対する就労支援策をより有効なものとしていくためには、サポステ以外の公的支援機関(ハローワークなど)を利用する者や、そうした支援を知らない、あるいは利用しないでいる中退者との比較分析によって、中退者の特徴やニーズを把握し、就労支援の課題を今後明らかにしていく必要があるだろう。

補論 サポステ利用者の実像：支援者への調査から

第1節 はじめに

補論では、地域若者サポートステーション（以下、サポステ）の支援者への調査を通じて、本報告書で論じてきた中退者も含め、サポステに来所する若者の全体像を把握する。分析に当たっては、新規登録時に支援方針を検討するためにサポステで判断される困難度のレベルに着目する。

調査は2014年2月～3月にかけて、若者自立支援中央センターによって実施されたものである。調査対象は、全国のすべてのサポステにおいて、利用登録時期が2012年10月～12月であったすべての利用者であるが、分析においては、中学・高校在学中の者等を除外した、5,625名の回答を用いている。

第2節 新規登録時のレベルと利用の経緯

本節の目的は、各サポステで行われている新規登録時のレベルごとの対象者像を、調査を通じて明らかにすることである。

サポステにおいては、新規登録時に以下のようなレベルわけを行っている。

図表補－1 レベルのイメージ

レベル	状態
1	進路についてのイメージがなく、興味・関心もないレベル。
2	進路について漠然としたイメージを持ち始めた、あるいは興味や関心が出てきたレベル。まだ明確な方向性を持つには至っていない。
3	進路についての方向性が見えてきて、情報収集をできるレベル。しかし、進路決定のための行動には移せていない。
4	進路への方向性が見えてきた（3のレベル）上で、就職や進路決定に向けて具体的に動き始めることができるレベル。ハローワークで求職登録し、求職活動を開始する、ジョブトレーニングなどを開始する等。
5	進路決定（就職、職業訓練、進学など）したレベル。進路先に行く時期が決定している場合も（例えば4月から進学、就職等）、進路決定とみなしてもよい。

資料出所：若者自立支援中央センターの提供資料の中から、レベル1から5の記述を抜粋。なおレベルのイメージは利用登録時2012年当時の分類である。

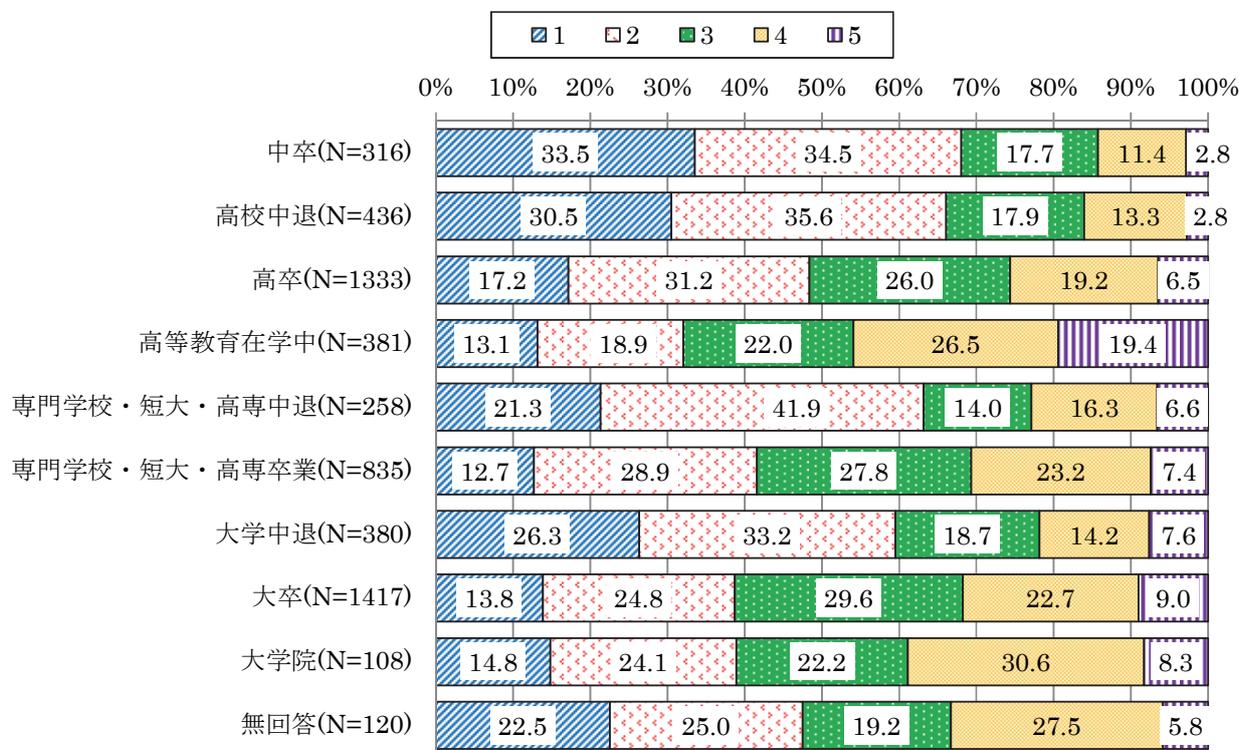
図表補－2はレベルの分布を示しているが、レベル1と2で半数程度を占めている。

図表補－２ レベルの分布

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5	合計	N
男	21.7	29.9	22.1	18.6	7.7	100.0	3,456
女	12.4	28.2	28.5	23.0	7.9	100.0	2,077
無回答	17.6	31.4	29.4	17.6	3.9	100.0	51
合計	18.2	29.3	24.5	20.2	7.8	100.0	5,584

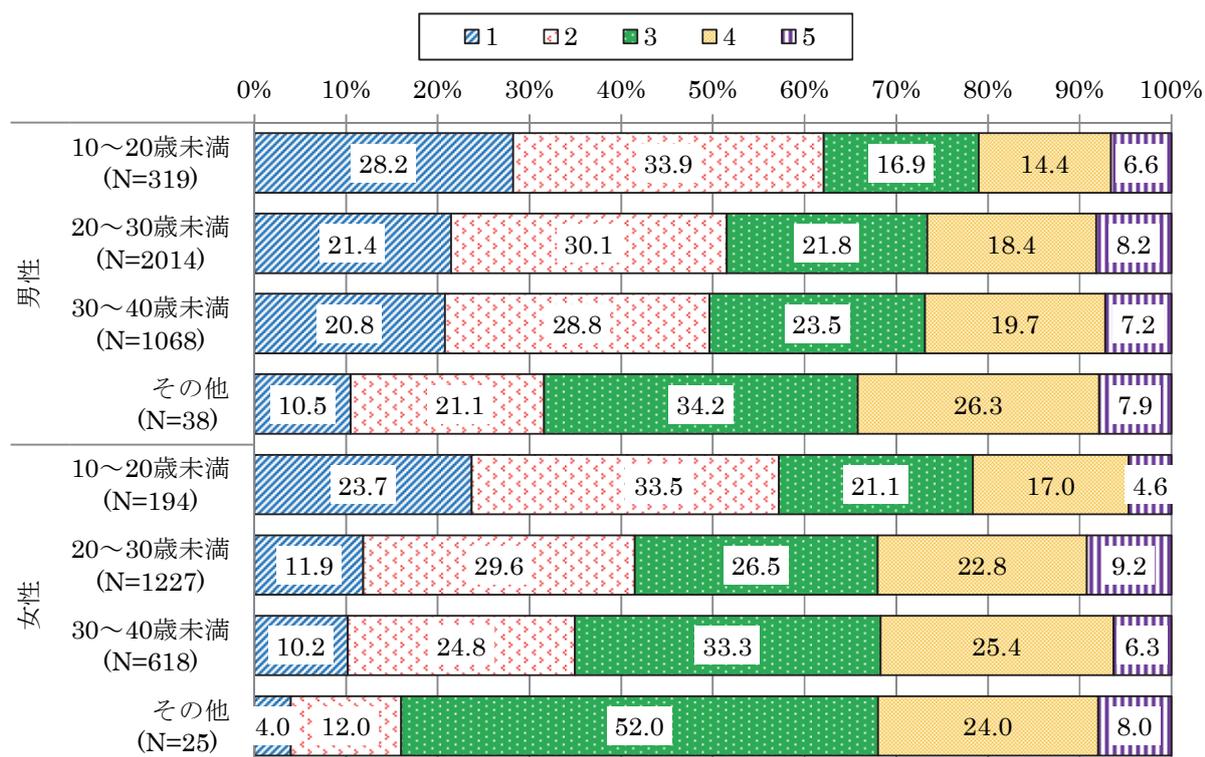
学歴ごとに新規登録時のレベル構成をみると（図表補－３）、中卒、高校中退、専門学校・短大・高専中退、大学中退などの中退者において、レベル1および2の割合が高くなっている。

図表補－３ 新規登録時のレベル構成（学歴）



年齢別に見ると（図表補－４）、男女とも年齢が若いとレベル1や2の割合が高くなり、年齢が高いとレベル3から5の割合が高い。

図表補－４ 新規登録時のレベル構成（年齢）



利用の経緯はレベルごとに違いがある（図表補－５）。レベル１と２は「ハローワーク（以下、図表ではHWと記載）以外の機関の紹介」や、「家族や知人の紹介」が占める割合が高い。他方でレベル３と４は「ハローワークからの紹介」や、「サポステのチラシやHP」で高くなっている。レベル５は支援機関を通じた紹介の割合が低いのが特徴である。

図表補－５ 利用の経緯

	HWからの紹介	HW以外の機関の紹介（医療福祉を含む）	学校からの紹介	家族や知人の紹介	サポステのチラシやHPで	その他	無回答	合計	N
レベル1	6.4	26.6	3.4	27.9	19.7	10.8	5.1	100.0	1,018
レベル2	11.3	24.3	2.6	20.7	26.9	9.1	5.1	100.0	1,635
レベル3	19.6	15.9	5.3	13.7	30.8	10.9	3.9	100.0	1,369
レベル4	18.5	12.8	7.4	10.4	32.0	15.3	3.7	100.0	1,129
レベル5	6.5	15.5	7.9	12.7	26.1	28.9	2.5	100.0	433
合計	13.5	19.6	4.8	17.6	27.5	12.6	4.3	100.0	5,584

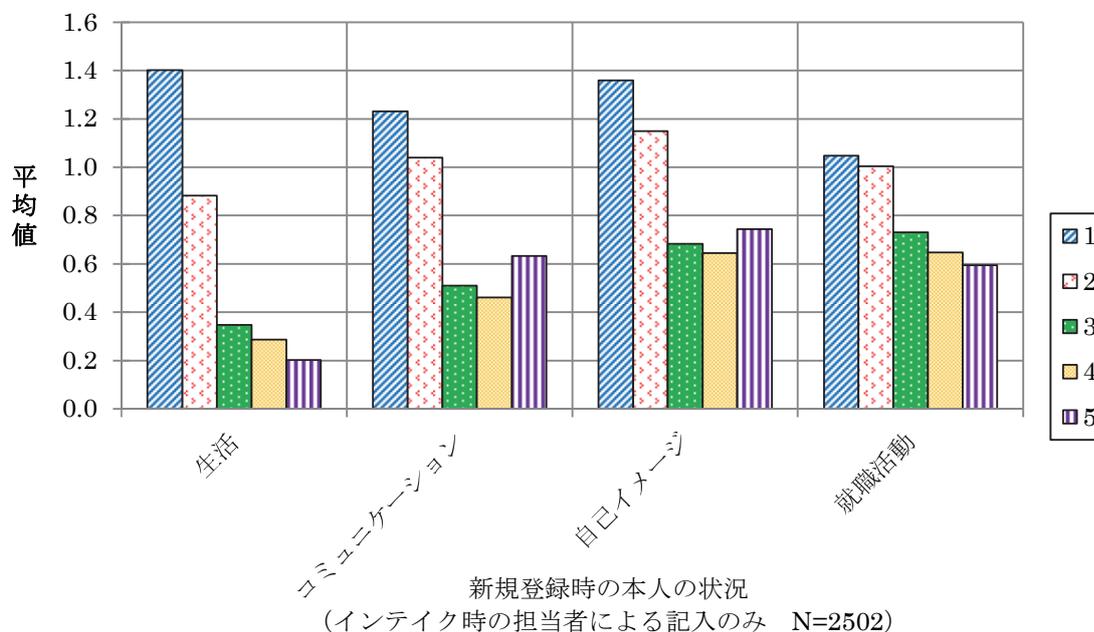
第３節 対象者の概要－個人の特徴

第３節および第４節の分析においては、原則として、初回のインテイク担当者によって回答された調査票に絞って分析を行う。

はじめにレベル別の利用者像を把握するために、生活、コミュニケーション、自己イメー

ジ、就職活動の各領域について、困難の度合いを検討した（図表補－6）。図表補－7に詳しく示す項目それぞれに、あてはまる＝1点、あてはまらない＝0点を与えて作成した。

図表補－6 新規登録時の利用者像（困難状況の度合い/レベル別）



生活、コミュニケーション、自己イメージ、就職活動のすべての領域において、レベル1およびレベル2の困難度が極めて高くなっている。レベル3から5については、コミュニケーション、自己イメージに関わる困難状況については、必ずしもレベルとの明確な対応が見られなかったが、就職活動についてはレベル3から5まで違いが見られた。

こうした結果から、レベル1から2、およびレベル3から5までとは利用者が抱える問題が質的に異なっていることが推察される。そのため、以下ではレベル1から2についての考察と、レベル3から5についての考察にそれぞれわけて分析を行っていくことにしたい。

図表補－7は困難状況の度合いについて項目ごとに詳しく示しているが、まずはレベル1および2について記述する。図表補－8には、レベル1および2に限定して、生活領域に関する困難状況を図示した。

レベル1はもっとも困難度が高い。約半数が昼夜逆転しており、また外出がほとんどなく、就職活動をするだけの体力もない。相手を見て話せない、集団に対する苦手意識がある。自己否定的な感情が強く、進路に限らず、自分で選択することが苦手であり、働いている自分がイメージできない点などにおいて特に困難度が高くなっている。

レベル2は、レベル1に比べるとやや生活領域での困難度は低い。しかし声が小さい、適切な受け答えが出来ない、自己否定的感情が強い、仕事への偏った見方にこだわる、求職活動の仕方がわからないなど、コミュニケーションや自己イメージについては課題が大きい。

レベル1においても2においても、就職活動をする以前の課題が極めて大きいと言える。

図表補－7 新規登録時の利用者像の詳細（困難状況の度合い／レベル別）

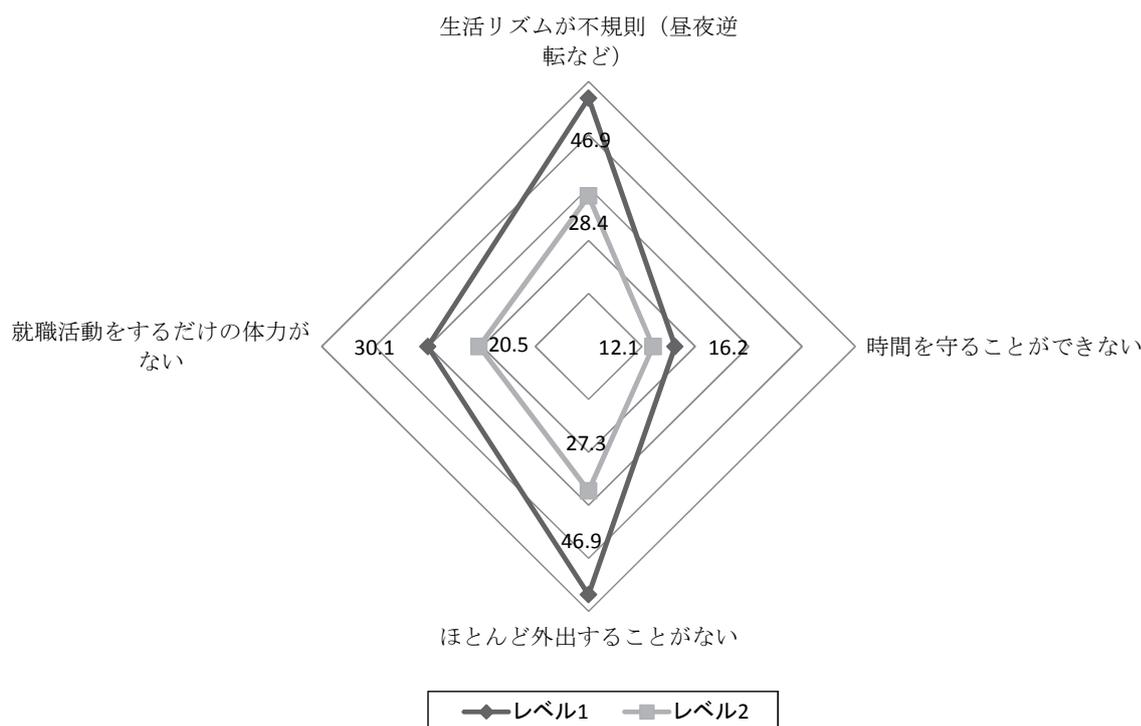
単位%

	生活				コミュニケーション				
	生活リズムが不規則（昼夜逆転など）	時間を守ることができない	ほとんど外出することがない	就職活動をするだけの体力がない	相手を見て話せない	声が小さく聞き取りづらい	聞かれたことに対し、適切な受け答えができない	集団に対する苦手意識が強い（セミナー等の集まりに参加するのを怖がるなど）	
レベル1	46.9	16.2	46.9	30.1	26.7	23.0	24.2	49.1	
レベル2	28.4	12.1	27.3	20.5	19.8	21.8	21.6	40.8	
レベル3	13.4	5.7	9.2	6.4	8.2	9.6	10.6	22.6	
レベル4	13.6	5.5	5.7	3.9	6.9	9.6	11.8	17.9	
レベル5	9.7	4.8	4.8	1.0	12.1	8.7	15.9	26.6	
	自己イメージ				就職活動				
	自己否定的感情が強い（「自分に何かができるとは思えない」など）	進路に限らず、自分で選択することができない	働いている自分がイメージできない	仕事への偏った見方にこだわる（「事務職はしゃべらなくてもいい」など）	相談や応募先の求人選択ができない	求職活動しようと思っはいるがどうすればよかわからない	履歴書をまとめることができない（経歴や経験の説明ができない）	就職活動の失敗理由がわからない（考えられない、受け入れられないなど）	
レベル1	42.2	37.8	38.8	17.0	31.7	36.6	22.6	13.7	10.5
レベル2	41.2	26.2	26.1	21.4	27.0	37.5	23.1	12.7	12.4
レベル3	25.6	11.0	11.0	20.9	16.5	26.4	17.6	12.5	30.8
レベル4	26.0	13.4	8.7	16.3	14.4	21.1	17.5	11.6	37.6
レベル5	31.9	12.6	13.5	16.4	16.4	22.2	13.0	7.7	36.7

図表補－8 新規登録時の利用者像の詳細

（困難状況の度合い／レベル1および2／生活領域）

単位%



次に図表補－9から、レベル3から5の傾向を比較し、それぞれのレベルの特徴について記述する。

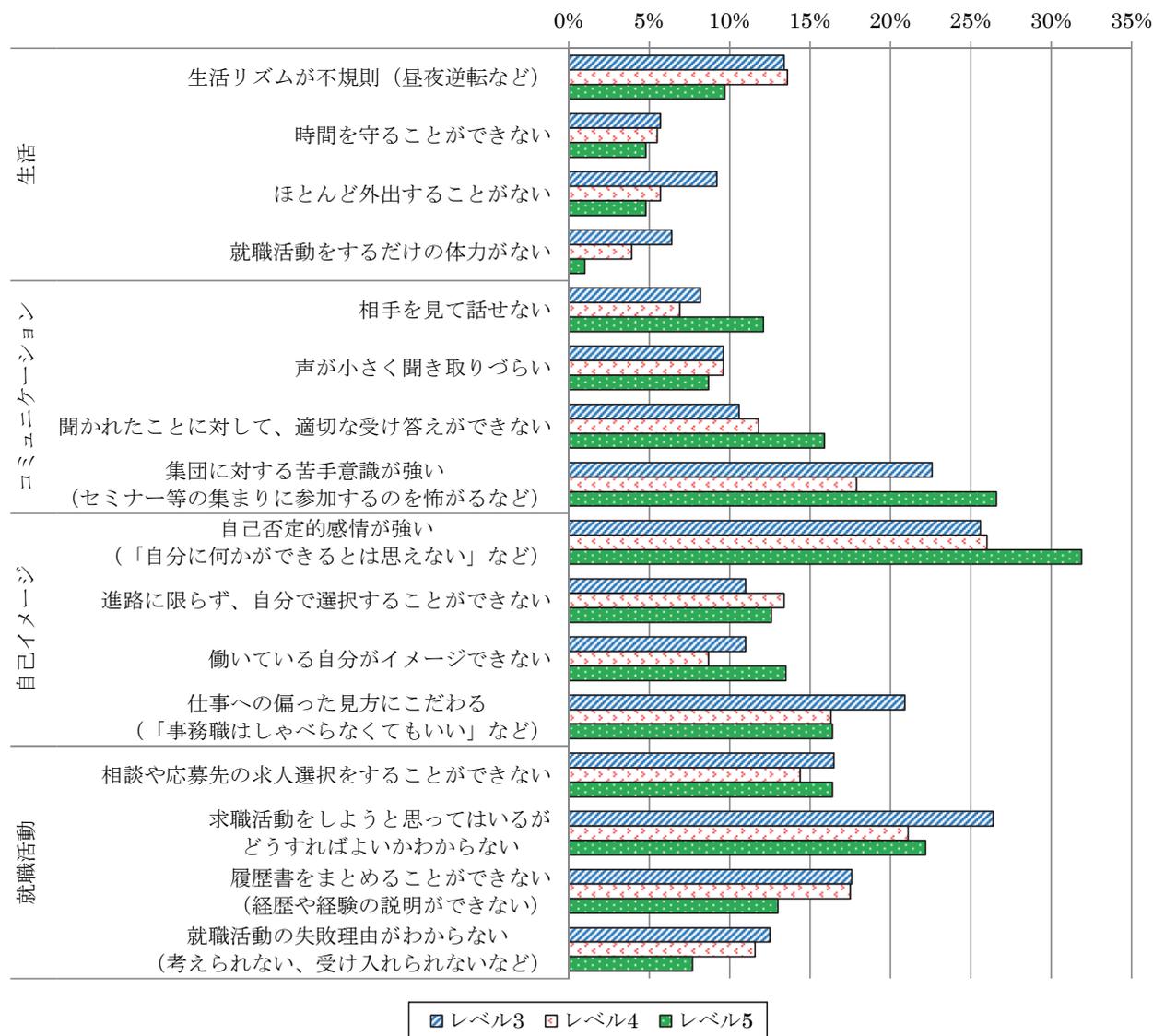
レベル3の特徴として、「生活リズムが不規則（昼夜逆転など）」はレベル4と同程度であるものの高く、「ほとんど外出することがない」、「就職活動をするだけの体力がない」で、レベル4と5よりも高くなっており、やや生活習慣に難が見られる。「集団に対する苦手意識が強い（セミナー等の集まりに参加するのを怖がるなど）」でも高い。また「求職活動をしように思っているがどうすればよいかわからない」、「仕事への偏った見方にこだわる（「事務職はしゃべらなくてもいい」など）」、「履歴書をまとめることができない（経歴や経験の説明ができない）」において高い。

レベル4の特徴として、レベル3と同じように、「生活リズムが不規則（昼夜逆転など）」という生活習慣にやや課題があったが、コミュニケーション領域ではあまり課題は見られず、就職活動における課題も「履歴書をまとめることができない（経歴や経験の説明ができない）」で高かったものの、レベル3から5において比較すると、就職活動の課題はやや小さい傾向があった。

レベル5は、生活習慣にはあまり課題はないものの、「自己否定的感情が強い（「自分に何ができるとは思えない」など）」傾向があり、またコミュニケーション領域での課題が大きく、「相手を見て話せない」「聞かれたことに対して、適切な受け答えができない」「集団に対する苦手意識が強い（セミナー等の集まりに参加するのを怖がるなど）」において高い傾向があった。

インテイク時の「レベル5」は、在学中の者やアルバイト中の者など何らかの所属先のある来談者に振られている場合が多い（約7割）。より早期からの支援が効果的であることが明らかになってきたために、支援対象者の幅を拡大してきたというサポステの進化に対して、レベル判断基準が当初の定義を引き継いできたことからくる混乱だといえる。所属先があるこうした人たちがサポステが支援対象として受け入れているのは、自己否定的な感情が強く、コミュニケーションに課題があるために、ハローワークですぐに効果的な求職活動を行うことが困難なためだと考えられる。

図表補－9 新規登録時の利用者像の詳細（困難状況の度合い／レベル3～5）



第4節 対象者の概要－背景的な要因

つづいて、対象者の背景的な要因について検討する。ここでは、①学校での経験、②職場での経験、③家族・家庭での経験、④疾病、障害の4側面から、各レベルの特徴を概観する。レベル別に見た①と②の結果については図表補－10に、③と④の結果については図表補－11に示した。なお、インテイク時に担当者であったかどうかで回答傾向に違いが見られるため、担当者による記入があったケースのみを扱う。

図表補－10 学校や職場での経験（レベル1～5）

単位%	学校での経験				職歴・職場での経験								N	
	不登校 経験 あり+ 疑いあ り	いじめ あり+疑 いあり	進級に関 わる成績 不振 あり+疑 いあり	他の問題 (友人関 係のこじ れなど) あり	職場の いじめ あり	パワハ ラ あり	セクハ ラ あり	トラブル をよく起 こす あり	職場での 孤立 あり	退職につ ながる失 敗体験 あり	就職活動 での失敗 経験 あり	他の問題 (労働環 境、長時 間労働な ど)あり		
レ ベ ル の 時 計	新 1	50.6	36.6	23.8	26.2	3.0	4.9	0.6	6.6	18.1	14.7	10.4	8.5	470
	規 2	34.2	28.3	16.2	18.1	6.6	6.1	0.6	7.2	19.5	19.7	13.7	10.7	692
	登 3	19.9	16.0	9.8	13.2	6.1	6.9	0.4	6.3	14.5	18.9	19.9	11.9	539
	録 4	15.9	17.4	6.8	12.8	6.6	6.8	0.7	4.9	14.3	17.0	15.5	16.6	453
	時 5	21.7	24.0	8.6	12.6	9.7	9.1	0.6	4.6	20.0	22.3	14.3	10.9	175
の 合 計	29.7	24.7	13.9	17.1	6.0	6.4	0.6	6.2	17.1	18.2	14.9	11.7	2,329	

注：在学中はすべて除外。インテイク時の担当者による記入のみ。

図表補－11 家族、家庭での経験、および疾病、障害（レベル1～5）

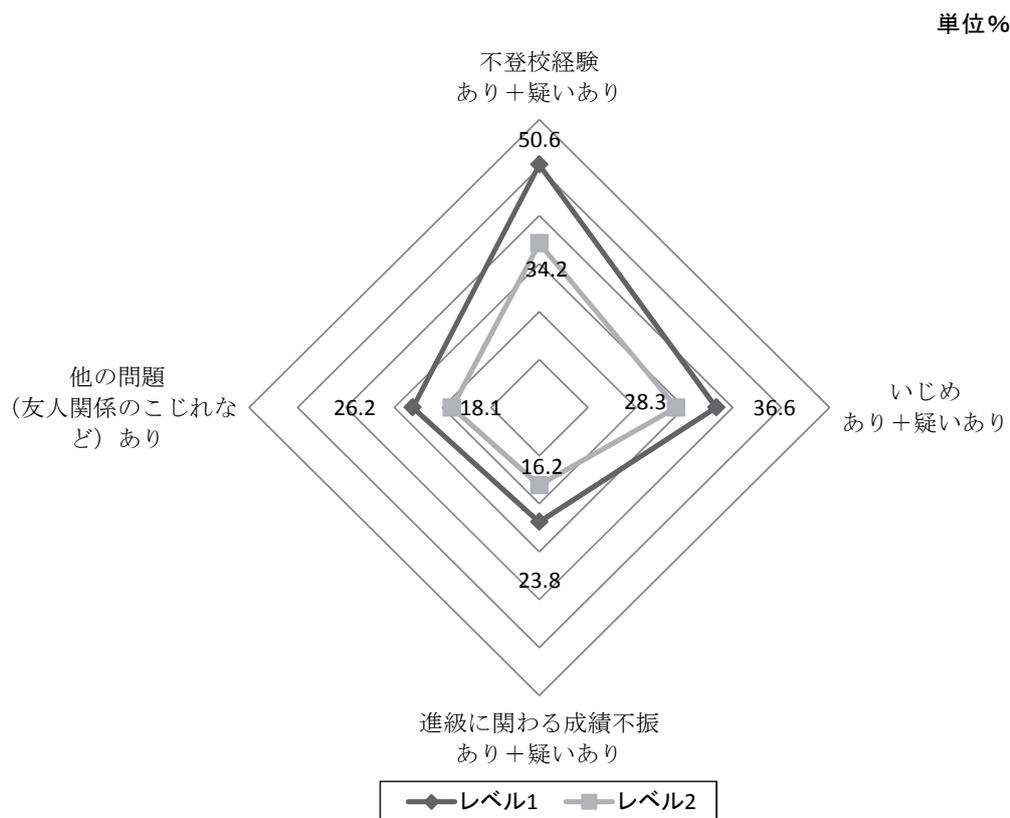
単位%	家族、家庭での経験						疾病、障害			N	
	親の過干 渉 あり+疑 いあり	DV・虐待 あり+疑 いあり	家庭内の 不和 あり	親との 離死別 あり	貧困 生活保護 世帯+生 保レベル の困窮状 況	他の家族 問題(家 族の疾患 等) あり	発達障害 診断あり	メンタ ル・精神 疾患 既往症あ り(就労 に制約あ り+な し)	他の健康 上の課題 既往症あ り(就労 に制約あ り)		
レ ベ ル の 時 計	新 1	23.6	4.9	28.9	12.8	7.9	11.9	7.4	38.7	5.1	470
	規 2	18.8	4.8	23.8	14.6	9.1	11.1	8.5	36.3	7.1	692
	登 3	9.1	3.9	16.1	9.1	6.5	9.6	4.6	28.2	5.6	539
	録 4	9.3	2.9	12.1	4.9	5.3	7.5	4.0	19.2	5.1	453
	時 5	13.1	5.1	18.3	7.4	4.0	13.1	6.9	34.3	2.9	175
の 合 計	15.2	4.3	20.4	10.5	7.1	10.4	6.4	31.4	5.6	2,329	

注：在学中はすべて除外。インテイク時の担当者による記入のみ。

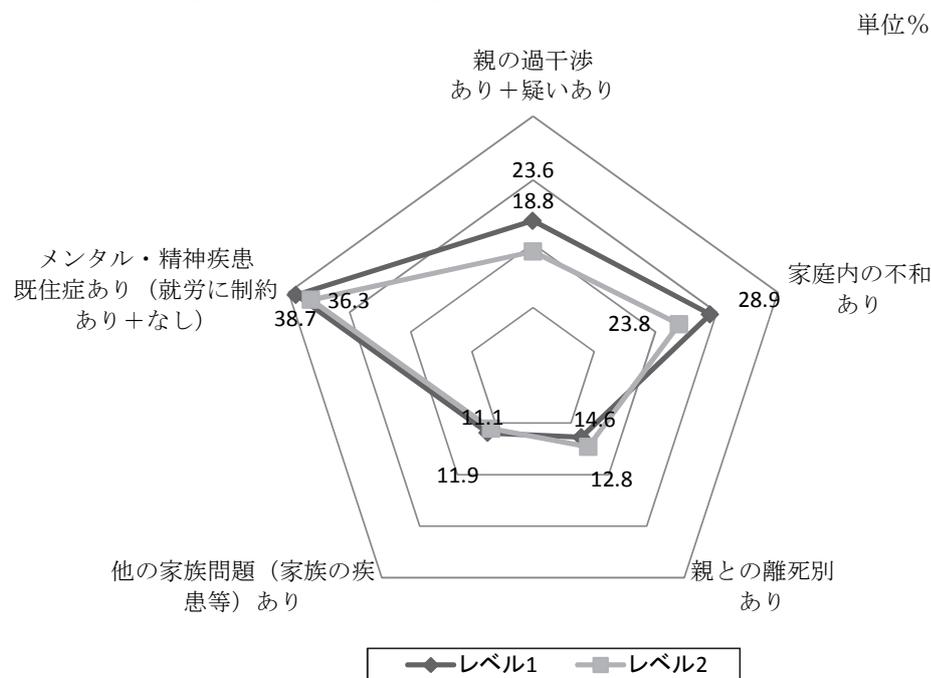
図表補－10 および図表補－11 から、レベル別にそれぞれの背景的特徴を見ると、全体としてレベル1と2で高い割合の項目が多くなっていることがわかる。なお、レベル1と2に関して、特徴的な項目は図表補－12 および図表補－13 で取り上げている。

特に①学校での経験では、「不登校の経験」、「いじめ」、「進級に関わる成績不振」が（図表補－10）、③家族・家庭での経験では、「親の過干渉」、「家庭内の不和」、「親との離死別」の割合がかなり高く、さらにはメンタル・精神疾患の既往症がある割合も他のレベルより高くなっている（図表補－11）。他方、レベル1と2では、レベル3から5と比較して、過去に何らかの就労経験がある対象者が割合として少ないためか、②職場での経験に関しては、それほど他のレベルと大きな違いは見られない。

図表補－12 学校での経験（レベル1および2）



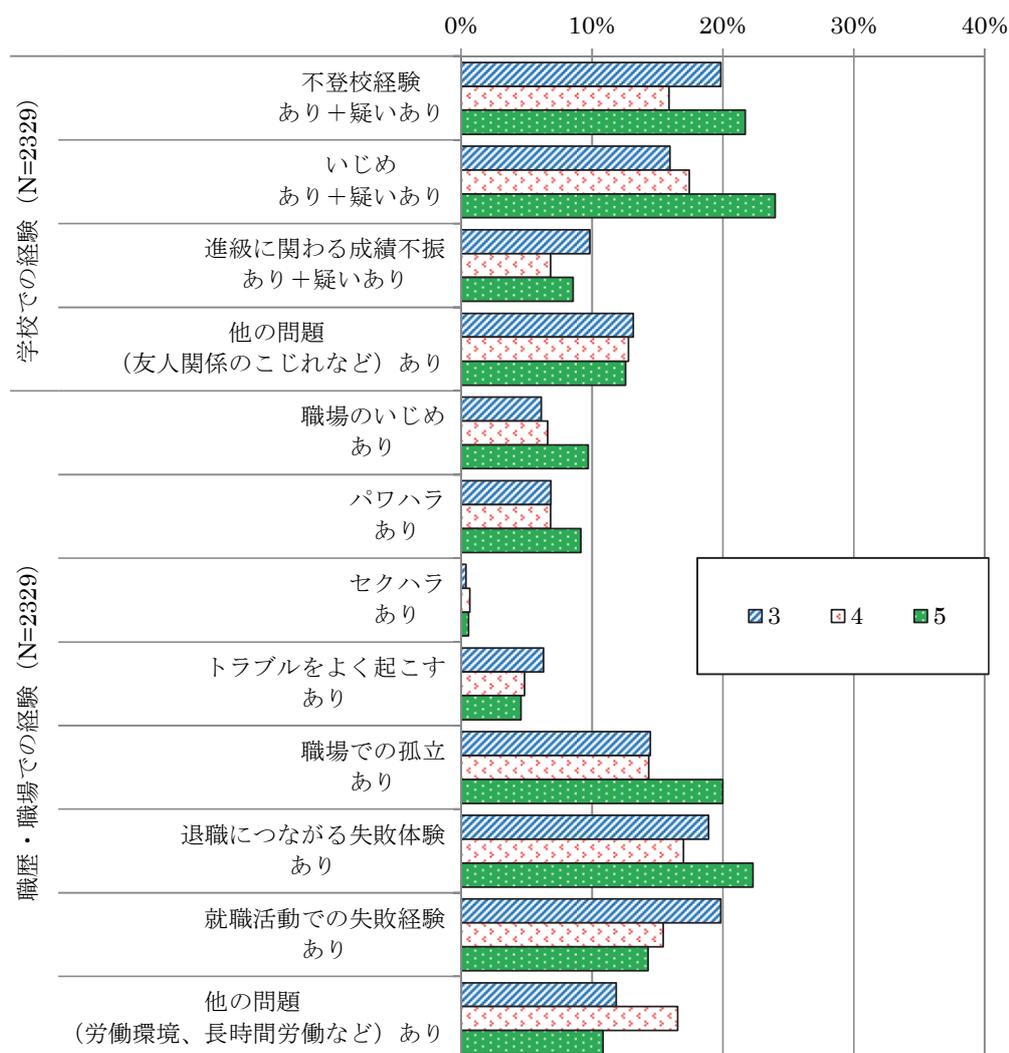
図表補－13 家族、家庭での経験、および障害（レベル1および2）



注：数値が高い項目のみ抜粋

以上より、レベル1・2とレベル3～5では、背景要因から見た困難さの割合はかなり異なっていると思われる。そのため、以下では前節同様に、レベル3から5について特に注目し記述する。レベル3から5のみを取り出し図示したものが、図表補-14と図表補-15である（図表中のNは全体の合計）。

図表補-14 学校や職場での経験（レベル3～5）



まず、図表補-14より、学校での経験について見ると、いじめや不登校の経験が3レベルとも、特にレベル5で高い。「進級にかかわる成績不振」に関してはどのレベルでも比較的低いが、レベル3で若干高い。

つぎに、職場での経験について見ると、「トラブルをよく起こす」割合はレベルが低くなるにつれ高く見られる。また、「就職活動での失敗経験」についても、同様な傾向が見られる。

特に「就職活動での失敗経験」が4や5よりも高いレベル3の者は、就労の前段階の就職活動において、何らかのつまづきを経験している場合が多いのではないかと考えられる。そ

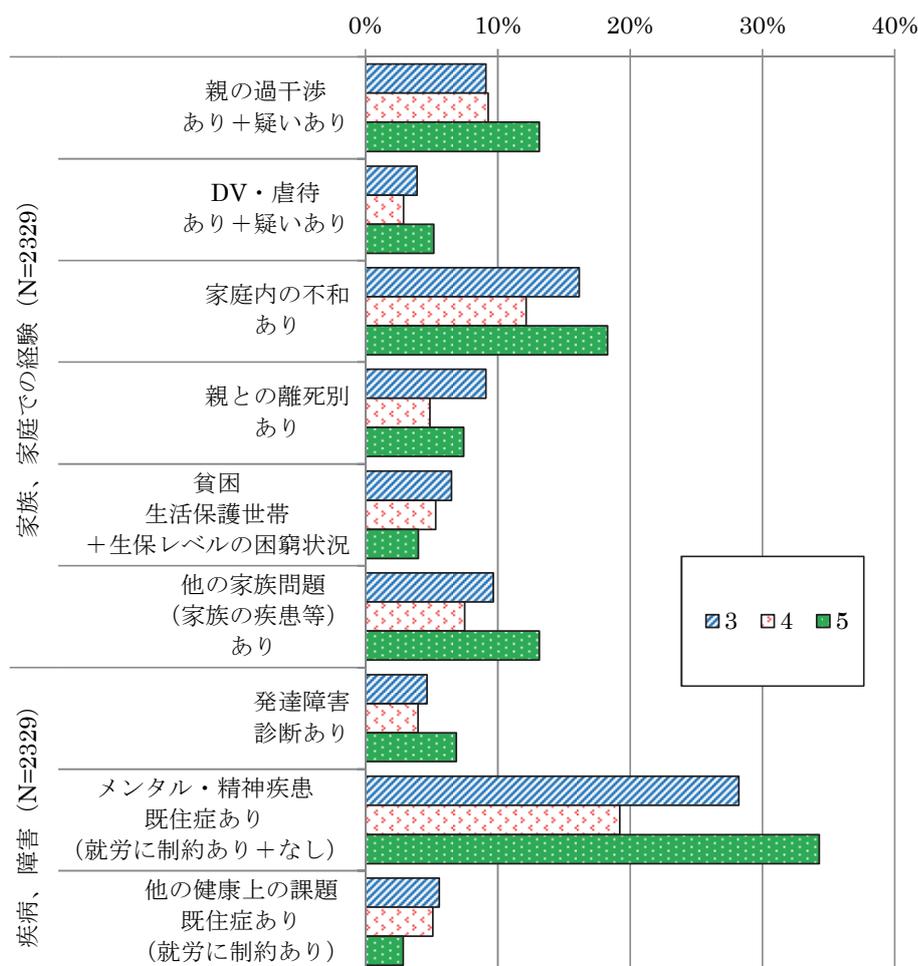
のため、そこに支援の必要性があるのかもしれない。

他方、レベル4は、レベル3と5の中間的な特徴を有しており、レベル4には、就労以前の段階で課題がある場合と、就労後の職場への適応面で課題がある場合が混在しているのではないかと考えられる。また、それに加えて、「他の問題（労働環境、長時間労働など）」では最も高い傾向にある。

レベル3と4は、利用の経緯（図表補-5）において「ハローワークからの紹介」の割合が高かったが、ハローワークでの職業紹介が難しいと判断されたために、サポステにリファーされているタイプが多く含まれているものと推測される。

レベル5では、「職場のいじめ」や「パワハラ」、「職場での孤立」や「退職につながる失敗経験」が高くなっている。レベル5では、仕事に就くという点では問題は少ないが、過去に経験した職場での負の経験から回復できるようなケアの必要性があるのかもしれない。

図表補-15 家族・家庭での経験、疫病、障害の状況（レベル3～5）



つづいて、図表補-15より、家族、家庭での経験について見ると、レベル3と5で、「DV・虐待」、「家庭内の不和」、「親との離死別」、「他の家族問題」での割合が（4よりも）高い傾

向にある。「親の過干渉」については、他のレベルと比べて5で高い。他方、貧困については、レベルに応じて、生活保護世帯や生保レベルの困窮状況にある割合が高くなっている。

疾病、障害について見ると、「発達障害」の診断あり、「メンタル・精神疾患」の既往症ありにおいてレベル5が最も高くなっている。

第5節 進路決定状況

進路決定状況について見ると（図表補-16）、男女ともに、レベル4で進路決定者の割合が最も高くなっている。

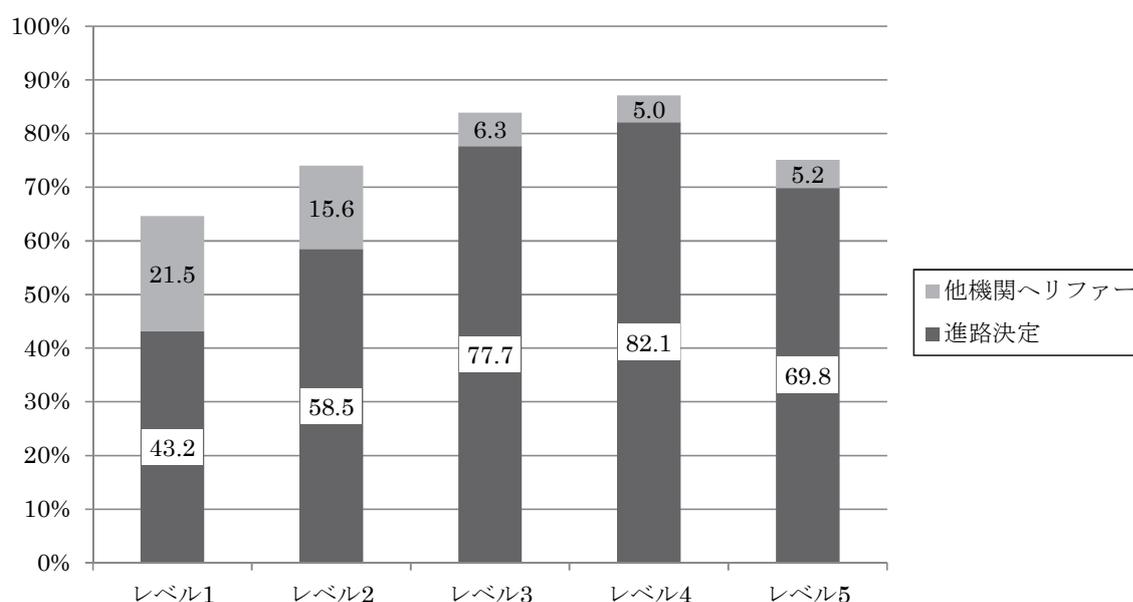
図表補-16 新規登録時のレベルと進路決定状況

	就職	職業訓練	進学	他機関 ヘリ ファー	利用中 断	その他	進路未 決定 (利用 中)	無回答	合計	N
レベル1	21.4	3.1	2.1	13.3	35.0	3.3	18.8	3.0	100.0	1,018
レベル2	33.5	4.7	1.7	10.6	29.1	2.6	15.5	2.2	100.0	1,635
レベル3	46.8	4.5	2.0	4.3	28.6	2.8	8.9	2.1	100.0	1,369
レベル4	59.1	3.2	1.5	3.9	19.7	2.7	7.9	2.1	100.0	1,129
レベル5	46.9	4.2	1.4	3.9	18.7	6.2	14.3	4.4	100.0	433
合計	40.8	4.0	1.8	7.7	27.3	3.1	12.9	2.5	100.0	5,584

ここから進路決定率（就職＋職業訓練＋進学）を算出した（図表補-17）。

重い課題を抱えるレベル1も進路決定率が43.2%、他機関へのリファーが21.5%、またレベル2もそれぞれ58.5%、15.6%となっており、決して低い数値ではない。

図表補-17 利用中断を除く進路決定率（就職＋職業訓練＋進学）



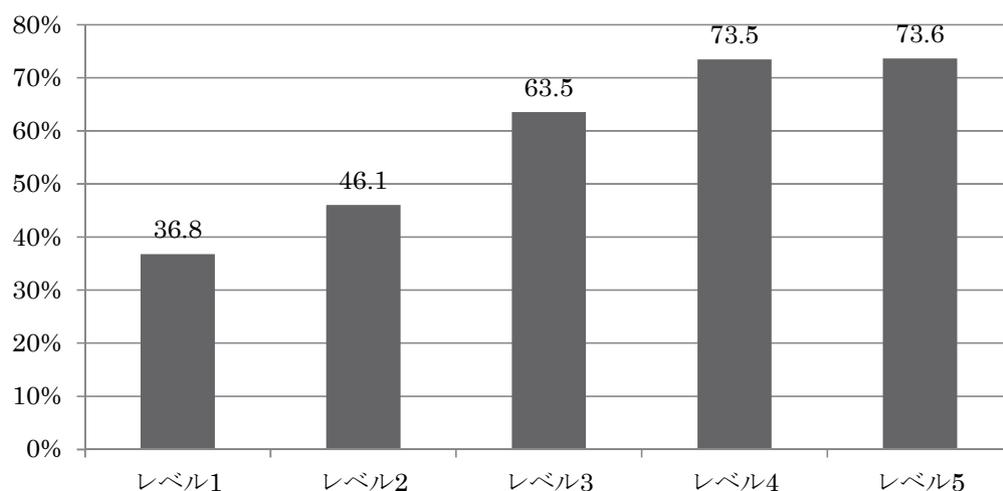
直近の状況については（図表補－18）、把握していない割合が 45.3%と高かった。そこで図表補－19 では、把握していない割合を除いて直近の進路決定状況（就労＋職業訓練＋就学）を示した。

図表補－18 新規登録時のレベルと直近の状況

	就労	職業訓練	就学	無業	把握して いない	その他	無回答	合計	N
レベル1	14.8	2.0	2.5	23.4	47.6	4.3	5.4	100.0	1,018
レベル2	21.6	2.0	1.8	18.0	45.0	4.8	6.9	100.0	1,635
レベル3	29.8	1.1	1.9	11.1	48.4	2.7	5.0	100.0	1,369
レベル4	37.7	1.0	1.8	8.7	44.9	2.1	3.8	100.0	1,129
レベル5	43.6	3.2	2.8	10.4	32.6	4.4	3.0	100.0	433
合計	27.3	1.6	2.0	14.8	45.3	3.6	5.2	100.0	5,584

図表補－19 によれば、直近の進路決定率よりは低くなるものの、大きく低下はしていないことから、進路が決定した場合には継続する割合が高いことが推測される。

図表補－19 新規登録時のレベルと直近の進路決定状況（就労＋職業訓練＋就学）



第6節 まとめ

新規登録時のレベルごとに対象者の困難性について、図表補－20 に整理した。それぞれの特徴は、レベル1 および2、またレベル3 から5における相対的な比較であることに留意されたい。

レベル1 および2 は、就職活動に至る前の課題が大きい。

レベル1 は、生活面での課題が特に大きい。貧困の割合は低い、親の過干渉や家庭内の不和がある。またメンタル面の問題や精神疾患を多く抱えている。

レベル2 は、生活面よりも、コミュニケーションや自己イメージに課題がある。親の過干渉や家庭内の不和、メンタル面の問題や精神疾患はレベル1 と共通する。

つづいて、レベル3から5の中での比較を簡単に要約する。

レベル3は生活習慣にやや難があり、就職活動での課題がかなり大きく、就職活動の失敗経験を抱えている。職業紹介を受ける前に、時間をかけた支援が必要な状態である。

レベル4はやや生活習慣に難があるものの、相対的に就職活動へのレディネスが整ってきているが、労働環境や長時間労働に起因する問題を体験しており、すぐにハローワークでの職業紹介を受けられる状態とはいえないようである。

レベル5は、生活習慣や就職活動へのレディネスには問題はないが、コミュニケーションや自己イメージにおいてかなり課題が大きい。また、いじめや不登校経験の割合が高く、退職につながる失敗経験やメンタル・精神疾患の割合が高い傾向が見られた。

進路決定状況は、レベル1でも進路決定率が43.2%、他機関へのリファーが21.5%、またレベル2もそれぞれ58.5%、15.6%となっており、一定の成果を上げていることがうかがえた。

図表補-20 レベル別新規登録時の困難度の概観

	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4	レベル5
利用の経緯	HWからの紹介	HWからの紹介	HWからの紹介	HWからの紹介	支援機関以外
生活	半数が昼夜逆転、外出なし、体力なし		生活リズム不規則、外出しない、体力不足	生活リズム不規則、外出しない、	
コミュニケーション	相手を見て話せない、集団苦手	声が小さい、適切な受け答えできない	集団に対する苦手意識		相手を見て話せない、適切な受け答えできない、集団に対する苦手意識
自己イメージ	自分で選択できない、自己否定的感情強い	仕事への偏った見方			働いている自分がイメージできない、自己否定的感情強い
就職活動			就職活動の仕方わからない、履歴書まとめられない	履歴書まとめられない	
学校での経験	不登校経験、いじめ、成績不振、人間関係のこじれなど	不登校経験、いじめ、成績不振、人間関係のこじれなど	いじめ、不登校経験	いじめ、不登校経験	いじめ、不登校経験高い
職場での経験	職場での孤立	職場での孤立、退職につながる失敗体験	就職活動での失敗経験	労働環境、長時間労働	退職につながる失敗経験
家族・家庭での経験	親の過干渉、家庭内不和、家族の疾患等	親の過干渉、家庭内不和、親との離死別、家族の疾患等	家庭内不和		親の過干渉、家庭内不和
疫病等	発達障害、メンタル・精神疾患	発達障害、メンタル・精神疾患			発達障害、メンタル・精神疾患

JILPT 調査シリーズ No.138

大学等中退者の就労と意識に関する研究

発行年月日 2015年5月28日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2015 JILPT Printed in Japan

* 調査シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)